戦没者慰霊

吉田を歩く

4月3日(水)、吉田地区で「招魂社(しょうこんしゃ)」と呼ばれる戦没者慰霊祭が行われます。地区の中心にある吉田小学校や保育所に隣接して熊野神社があり、それを背にするように招魂社がまつられています。

招魂社は明治維新の殉難者慰霊のため各地でまつられ、東京招魂社は1879(明治12)年「靖国神社」に、地方でも「護国神社」と改称されたとされます。

境内にある「招魂社のいわれ」の案内板には、1912(明治45)年に帝国在郷軍人会吉田村分会が設立したとあります。同会は傷痍(しょうい)軍人や軍人遺族の救護などを目的に明治43年に発足し、分会は市区町村内の会員で組織されたといいます。

1916(大正5)年の吉田村の世帯数280戸、人口1590人、村在郷軍人会の会員は95人でした。

1904(明治37)年2月から翌年9月にかけての日露戦争には境内の「従軍紀念碑」によると、吉田村から33人が出征しました。碑は終戦後、1905(明治38)年12月に建てられましたが、碑に名の刻まれた出征兵士のうち1人の戦死が生家に伝えられたものの、後に無事帰郷したことが当時の新聞で報じられました。

本社右側にある高さ60㎝ほどの墓塔は1877(明治10)年の西南戦争に出征し、現在の熊本県山鹿市で戦死した人のもので、招魂社がまつられたためここに移されたのでしょう。

「招魂社のいわれ」によると、西南戦争から先の太平洋戦争までの戦没者114柱がまつられたとされます。

4月3日の戦没者慰霊祭は、招魂社創立の1912年から110年余り続き、かつては「招魂祭」や「村の春季祭日」、「三の午(うま)」ともいわれ、にぎわいを見せました。

「英霊に対する感謝と平和の尊さを永く後世に伝承を祈念し」、「招魂社をまもる会」に引き継がれています。

(市文化財審議会委員・依知川雅一)

吉田地区の招魂社

問 秘書課広報広聴班☎73・0080